

福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財) 第五福竜丸平和協会
〒136 東京都江東区
夢の島3-2
都立第五福竜丸展示館内
電話 03-3521-8494

NPTとCTBT

服部 学

一九九五年は大変な出来事の連続した年だった。核問題でもそうだった。広島・長崎に原子爆弾が投下されてから五十年という節目の年に、核兵器不拡散条約(NPT)が無期限延長されてしまい、スミソニアン博物館では原爆被害の展示が拒否され、そして中国とフランスは核爆発実験を再開した。沖縄基地の問題も「核の傘」と切り離して考えることはできない。しかし一方では多年核兵器廃絶の運動を続けてきた科学者パグウォッシュ会議とロートブラット博士がノーベル平和賞を受けたという嬉しいニュースもあった。

この二年ほど、伏見先生や小川先生たちと一緒に核拡散問題の勉強会を続けてきた私にとっては、NPTの無期限延長が決まったことで、核兵器国の存在が無期限に認められてしまったことが、今後の世界の核問題に大きな影響を残したと思わざるを得ない。そして細川内閣以来の歴代の日本政府が無期限延長のお先棒をかついできたことを残念に思っている。

五月十一日に終了したNPT延長会議は、一九九六年末までに、包括的核実験禁止条約(CTBT)をまとめることで合意した。しかし、というよりもそれだから、四日後の十五日、中国は核実験を再開するし、フランスも九月以来、十一月までに四回の核実験を強行している。これは既に約一千回もの核爆発を行い、コンピューターに十分なデータをため込んでいて、今後は流体核実験あるいは流体力学的実験と呼ばれる極めて小規模な実験室内での実験でも新しい核弾頭の開発が可能アメリカと、実験回数少ない中・仏両国との間の、いわば核兵器国間の矛盾のあらわれと見てよいであろう。そしてどちらも、いわゆる核抑止力に頼るという考え方をもち続けようとしている。これではCTBTが出来ても、核兵器全面禁止への道はほど遠いと思わざるを得ない。

CTBTの交渉は、九四年一月以来ジュネーブの国連軍縮委員会(CD)で続けられてきているが、実はこれも極めて難航している。たとえば前記の問題とも関連するが、爆発の規模をどこまで制限するかは最大の課題となっている。これは検証の問題ともからんでくる。かつての部分的核実験禁止条約(PPT)が地下核実験の抜け穴を残したために核軍拡の歯止めとなり得なかったのと同じことになるおそれもある。あるいは中国は平和目的の核爆発は除外すべきであると強く主張している。条約の発効と脱退の条件等も意見が一致していない。この他にもたくさん問題点がある。

私たち日本人が考えるべき問題もある。九月のCDの会議で中国代表は、日本政府が「他国の核の傘の保護を享受していることや、核兵器の使用の可能性に立脚している核抑止戦略を支持していることには沈黙を守りながら、核実験禁止の重要性だけを説いている態度と意図を疑わざるを得ない」と述べている。私たちは、核兵器国には核兵器の廃棄を、核実験を行おうとする国にはその中止を求めると共に、日本政府に対しては核の傘からの脱却を強く求めて行くべきであろう。

1) 核拡散問題研究会の作成したパンフレット「核兵器不拡散条約の延長についての意見」は、展示館にも置いてあるので、ご関心のある方はお読みいただければ幸いです。

(立教大学名誉教授・協会理事)

トビウオのぼうや展示館に飛ぶ——紙芝居に熱中

「青い青いみなみのうみです。なみがまっしろういレースのふちかざりをつけている、しずかなサンゴじょうのそばに、トビウオのおやこがすんでいました…」

紙芝居「トビウオのぼうやはびょうきです」を読む澄んだ声が今日も展示館に響きます。熱心に見入る子どもたちの表情のなんと豊かなことでしょうか。「先生読んで」「お母さんも」とせがむ子どもたちもあります。

十一月、展示館を訪れた学校は昨年より少し少ない百四十校ほどでしたが、見学後、船首下の机にそっと置かれた紙芝居の舞台で、周りいっぱいの子供に「トビウオ

のぼうや…」を読み聞かせる学校がいくつもありません。

二十校をこえる学校が次々に訪れた十一月二十四日、川崎市の養護学校の三七名の生徒は、他校の見学者に包まれるように、先生が朗読する紙芝居に熱中、「だれかトビウオの小さいぼうやをたすけてやれる人はいないでしょうかーおわり」の声に涙ぐむ生徒もあって印象的でした。翌日訪れた横浜市の生活クラブ生協を中心とした「フリースクール」のお母さんたちの恒例の見学会も、今回は夏の広島におもむいた子どもたちを伴った見学会で、説明を聞きつつ一時間余館内を巡り、懇談の会では



船を見つめ、説明を聞く子どもたち

●毎日新聞より(11・29付・投書欄「みんなの広場」)

ばくだんやめて、なかよしに
小学生 西浦一成 7(奈良書野郡)
きょう、せんせい「とびうおのぼうやはびょうきです」というほんをよんでもらいました。

ある日、どおんとおとがしてそれがまっかになり、そのあと、しろいこながおちてきました。そ

れをみていたぼうやは、あたまがいたい、いたいといいました。

おかあさんは、なおそうとヒトデのびょういんやタツノオトシゴのくすりやさんにいきますが、なおりません。とてもかわいそうでした。

ほんをよんでもらったあととせんせい、これは、ばくだんをせんそうでつかい、どれぐらいの人がころせるかというじっけんをした

からだとおしえてくれました。そして、フランスがこれとおなじようなことをしたこともおしえてくれました。ばくだんできかなやどぶつをころさないでください。人もころさないでください。

げんしばくだんにほんでおおぜいの人がしました。

ばくだんはやめて、なかよしにしてください。

中国から視察団

十二月十二日、中国人民平和軍縮協会の視察団(曹傑杰団長)一行五名が第五福竜丸展示館を訪問しました。広島平和文化センターが一九八八年以来相互訪問を行なっている中国の民間の平和団体で、被爆50年の今年、核兵器廃絶への広島島の願いを共にしたいと招請したもので、視察団の意向で東京の展示館訪問が決まりました。一週間の日程で原爆資料館、原爆病院、放影研から、島根原発、大阪海遊館などを視察、展示館のあとは江戸東京博物館を訪問すること。

展示館では館職員の「小さいが人類の生存、人類の未来を語る展示館です。核実験被害、核兵器の非人道性を示すとともに核兵器廃絶への国民の鮮烈な意志をもしみ込ませた船です」との説明にうなずきつつ視察、終って案内した阿部滋文化センター主事等を交えて閉館まで懇談しました。

曹団長は「原爆資料館と共に鮮烈な印象を受けました」と述べ、おみやげの絵本「わすれないで」を中国の子どもたちに見せたいと語りました。

水爆の開発と軍備競争の開幕

—ソ連の核保有で一気に加速—

小川 岩 雄

自分たちが作り出した原爆が、当初の意図に反して実際に使用され、しかもドイツではなく広島・長崎に惨害をもたらした上に、世界を軍備競争、ひいては核戦争の不安に陥れたことで、米英の多くの科学者は痛恨に暮れ、軍事研究を離れて大学などに戻った。だが、テラー博士ら一部のグループは、ウランやプルトニウムだけを使う狭義の原爆(核分裂爆弾)をはるかに上回る強力な新型核兵器(水素爆弾)(水爆)の実現に興味と執念を抱き続けていた。

水素爆弾とは重水素、三重水素(いずれも普通の水素の同位体)など軽い元素の原子核が、超高温の気体中で激しく衝突し、合体する(融合する)さいに、大量のエネルギーを放出することを利用する爆弾であって、熱核兵器、融合爆弾などとも呼ばれる。

んな超高温は到底作れないため、水爆の実現は実際上不可能とされていた。

ところが原爆の出現で事情は急変した。原爆が爆発の瞬間に作り出す数十万度の超高温と大量の中性子やX線、それらによる強烈な電磁的衝撃波は、重水素と三重水素を含む核融合爆弾の中で熱核反応を爆発的に引き起こすであろう。水素爆弾は今や手の届く技術的目標となった。

しかもそれはウランのような特殊な金属を大量に必要としない。例えば重水素は全世界の海水中に無尽蔵に存在するし、三重水素も原子炉中でリチウムに中性子を照射すれば容易に得られる。また、核爆薬がウランなどよりずっと軽く、爆薬の軽量化ができるし、破壊力も原爆と違っていくらでも大きくできる。

これらの特長を兼ね備えた新兵器の開発を目指して、文字どおり「天界の火を盗む」ような「壮挙」が、テラーらの血をどれほど騒が

せたかはたやすく推察できる。そしてその背後には、大戦後も何とか生き延びようとする軍需産業や軍部などの(軍産複合体)の強い支持があったろうことも想像に難くない。

さて大戦終結に先立って創設された国連(国際連合)では、米国が当分核兵器を独占することを前提とした原子力国際管理案(いわゆるバルーク案など)を次々と提案したが、いずれもソ連に拒否され、米国内ではソ連もまもなく核兵器を持つのではないかと、この不安が高まった。

テラーは、ソ連の核に対抗するには水爆の開発が絶対に必要だなどと主張したが、こんどは原爆開発の場合とは異なり、多くの科学者の激しい批判と反論に直面しなければならなかった。例えばアインシュタイン博士なども一九四七年に早くも「この爆弾は広島と長崎に投下された原爆の一万倍もの破壊力を持つかも知れない」と警告し、開発の中止を訴えている。

一方ソ連は一九四九年八月末、ついにセミパラチンスクで初の原爆実験に成功し、米国の核独占は終わりを告げ、不安は現実となった。米国の水爆推進派はこの機に乗じて水爆開発を「緊急計画」に

格上げしようとしたが、その是非を問われた原子力委員会(AEC)の一般諮問委員会(GACC)(委員長はオッペンハイマー博士)は全員が反対し、その旨の報告書を出した。

しかし結局はワシントンの推進派が巻き返し、トルーマン大統領は一九五〇年一月、多くの反対を押し切り水爆の製造を命令した。一九五二年十一月一日、米国は中部太平洋マーシャル諸島のエニウェトク環礁(かんしょう)で史上最初の水爆実験を実施した。爆発規模はTNT通常火薬十メガトン(一千万トン)に相当し、広島原爆の約七八百倍、爆心となった島は一瞬のうちに姿を消したという。

実験は成功だったが、反対派が予想したとおり、この実験は米国の核優位を保証するものとはならず、翌五三年にはソ連もまた水爆実験を開始し、ここに米ソ間の激しい軍備競争の幕が切って落とされた。ソ連の水爆開発の指導者は後に反体制科学者として「流刑」まで受けた科学アカデミー会員アンドレイ・サハロフ博士であったと言われている。

(立教大学名誉教授・協会理事)

この図のまえに自分の歩みを誓わせ：

—さようなら丸木位里先生—

清 水 文 恵

一九九五年十月十九日、午前十一時十五分、丸木位里先生は、眠るように九十四歳の生涯を終えられました。巨星落つ、秋の空は深く澄み渡る日々が続きました。

「位里さん一言」

「絵は何を描けばいいか」とよく尋ねてくるが、何を描けばいいんじゃないに、自分はどういう考えで生きていくかということから始めなきゃだめだね。何を訴えて、何を考えて生きていかなきゃならんか、絵を書く前にまず人間がどういう人間であるべきかということとを自分でも考え直していかなくちゃいかん。そういう人間でありたいという人間にならなくちゃだめだね。(絵を書く人に贈る遺言より)

この「位里さん一言」は、送られてきた「丸木美術館ニュース」に、先生のご訃報と共に書かれてありました。が、その「一言」は、絵の書けない私にも、心に深く刻まれたことばでもありました。

それは一九六三年八月十三日、

私たちが、当時の練馬のお宅に、俊先生をお尋ねしたときでした。

俊先生は、「毎年夏になると広島を思い出して、ゾッと背すじが寒くなります。人間があんなに死んでいって……。人間の生命が一番大切なことから、人間を描かなければならないと思って、自分で裸になって鏡の前で当時の姿を見て見ました」と。さらに「十部作で八年かかり、描いた人間は九百人、二人でね」と、おっしゃられたのです。

このとき私は、今まで迷っていたり、わからなかったことが、はっきりしてきて、どんなにか勇気付けられたことでしょう。

その後、位里先生、俊先生共に「原爆の図」、「南京大虐殺」の図、「沖縄戦の図」、また「アウシュビッツの図」などの芸術活動を通じて、一貫して反核、反戦を願いつつ、平和の尊さを全世界に訴え続けてこられ、最後まで反戦、反核を貫

く信念の人であられたのでした。

位里先生の美術館葬は十一月九日、丸木美術館において無宗教により執り行なわれました。

△原爆の図▽

この 異形のまえに
自分を立たせ
この 酷烈のまえに
自分の
歩みを 曝させよう
この 図のまえに
自分の
歩みを 誓わせ
この 歴史のまえに
未来を
悔 あらしめぬよう

峠 三 吉 詩
安 井 郁 書

丸木美術館に着くと、すぐこの詩碑が目に入ります。

お別れの儀式までに、幸いなことに時間が十分にあったので、久しぶりに館内をひと廻りして特に「原爆の図」に時間をかけて見ました。

館の裏にも出てみました。二つ

三十人の人々が、土手下のゆるやかな川の流れ、田園風景の広がる向こうは比企丘陵であるうか、都会の雑音から、しばし逃れるように眺めておられる。あの川原の小さな赤い石、白い石は、美術館の入口の敷石に嵌め込まれたつけ、館が建って間もない頃、私たちも俊先生のお許しを得て、その美しい石を川原から拾って持ち帰ったことがあります。

故位里先生の祭壇は、館の一番奥の「南京大虐殺の図」のある部屋に設けられました。ベレー帽をかぶり、ちょっと横を向いて、穏やかに笑いかける位里先生の遺影は、壁面いっぱいの生花の中に際立って、ご立派に見えました。尊敬して止まなかったと館長の関屋綾子さん、自由な大海原のような偉大な個性の方であったと、袖井林二郎さん、埼玉県知事、東松山市長、その他の方々も、最後まで反戦、反核を貫いた信念と、偉大な芸術活動を通じて、平和の尊さを全世界に訴え続けられた、位里先生とたたえられました。別れを惜しむ人々の列は、館の外まで続きました。

(草の実会員)